

## 公立小学校における二言語併用授業の試み —多文化共生教育の可能性—

Yuan.馬場 裕子 (立命館大学大学院校先端総合学術研究科博士課程 院生)

### 1. はじめに

1990年代からのニューカマーの児童たちの公立学校への入学は、モノリンガルな単一文化であった日本の公立学校が多文化や多言語環境に直面する転機となった。佐藤(2010)が指摘するように、外国人児童の今後の教育政策を考えるためには、公教育を再定義すると同時に、公教育のもとで展開されている「国民形成のための教育」を見直すことが不可欠となる。教育目標を「国民形成」から「市民形成」へ転換し、「市民性の教育」(シティズンシップ教育)をいかに具体化するか(佐藤2010: 152-153)が21世紀に課された教育課題のひとつである。

この教育課題について検討するための1つとして、本発表では現在の外国人児童に対する主要な支援策である「取り出し授業」と在籍学級における「入り込み授業」における問題、すなわち、外国人児童を受け入れた日本の学校文化の問題を検討し、在籍学級での二言語併用型のバイリンガル教育の可能性と課題を指摘することを目的とする。

外国人児童の支援に関する従来研究は、1)外国人児童の日本語学习上の問題を論じるもの、2)外国人児童に適応を強いる日本の公立学校の文化的問題を論じるものに大別される。第一の研究群では、外国人児童の指導形態である「取り出し授業」に問題があることを指摘し、「取り出し授業」と在籍学級との連携の方途を検討する議論が散見される。だが、第二の研究群が問題視する学校文化を見直すことで、在籍学級における外国人児童支援の方途を模索する研究は十分になされていない。

本発表では、神戸市立X校におけるフィールドワークをもとに、外国人児童の支援のあ

り方は学習者ストラテジーに配慮しながら決定される必要があることを指摘する。またスペイン語での授業と日本語・スペイン語二言語併用による提案授業の実施の結果をもとに、外国人児童が在籍学級で正統的周辺参加者となりうるための支援の在り方とその課題を提示する。

### 2. 研究データ

本発表で用いるデータは、2006年10月～2008年6月まで発表者がボランティアとして神戸市立X校においてスペイン語母語話者日系4世小学校4年生男児Aの外国人児童支援に関わり、フィールドワークを行った調査に基づいている。支援員として筆者は、概ね1週間に2回、取り出し授業による日本語指導、入り込み授業による教科指導を行った。また保護者への通訳・翻訳業務の記録や、担任や保護者等へのインタビューの記録も使用した。

### 3. 神戸市X校の支援実践と支援児童の概要

#### 3.1 X校における外国人児童に対する実践

発表者が勤務した2006年から2008年の間に同校には、2人の外国人児童(Aと従妹)が学んでおり、発表者を含む「ボランティア」2人と「サポーター」1人が交代で支援にあっていた。指導形態は、取り出し授業と入り込み授業をコーディネーター役の学級担任と相談しながら、そのつど決めていた。指導の詳細については支援員に任されており支援員同士が密に連絡を取り、継続性のある支援を試みていた。指導内容のカリキュラムは、日本語教師有資格者であり学校教員経験者である筆者が作成していた。そのカリキュラムに基づき、筆者が日本語指導と教科指導を担

い、もう1名の「ボランティア」はその復習に当たった。

### 3.2 外国人児童が抱えた問題

Aは両親と妹、父方の叔母とその子どもと同居していた。父親が10年前に出稼ぎで来日し、Aはごく短期間の来日の後に母親と妹とともに2006年9月に再来日し、日本での長期生活を始めていた。父親は10年にわたる出稼ぎの成果で自国に家を立て、Aの支援期間中は貯蓄のために自動車関連工場で働きながら滞在を続けていた。父親は日系人であり日本語を多少話せたが、母親は移出元F国出身であり日本語は話せなかった。家庭内言語はスペイン語であった。Aは、取り出し授業と、入り込み授業の二種類の支援を受けていた。しかし、Aは取り出し授業を極端に嫌い、来日直後の半年間においては1日に1時間だけ取り出すことしか了解を得られなかった。また、クラスメートとのトラブルも来日後何度も経験していた。発表者は、Aと担当教員・他の児童との関係改善のための二度の特別授業を提案した(以下、提案授業と呼ぶ)。

第1回目の提案授業は、2007年3月7日に4年生の国語科書写と学級活動の合科授業「心を伝え合う」におけるスペイン語による授業である。第1回提案授業の目的は、(1)他の日本人児童に対しては異言語環境に身を置くことでAがどのような心境で授業に臨んでいるのかを体験させ、かつAのアイデンティティの一端を担うスペイン語に触れる機会を提供すること、(2)Aに対しては自信を取り戻させる機会を提供することにあつた。

第2回目の提案授業は、2007年3月13日に国語科授業「ごんぎつね」における日本語とスペイン語の二言語併用授業である。この授業では、Aを正統的周辺参加者として授業に組み込み、スペイン語と日本語で児童同士が互いの意見を言いあう多言語・異文化コミュニケーションを体験させることで、Aと日本

人児童双方のあいだの関係性を改善することを目的とした。

### 4. 結果と考察

スペイン語での授業と日本語・スペイン語二言語併用による提案授業は、(1)取り出し授業や入り込み授業で失われた外国人児童の自尊心を回復し、(2)異文化・異言語環境にある児童の相互理解を促進させ、協働しながら学習課題を共有し考えようとする態度を養い、(3)外国人児童が在籍学級で正統的周辺参加者となり得る効果があることが確認された。ただし、この提案授業はあくまでAの問題を解決するための試みとして実施したものであり、在籍学級における外国人児童の支援策としてより大きな枠組みで考えていくためには、数多くの課題が残されている。

また、在籍学級における二言語併用型授業の実施は、当然のことながら、外国人児童だけでなく他の児童による学習効果をいかに維持・向上させるかとともに考慮しなければならない。すべての授業で二言語併用を試みるためには、大学等でのバイリンガル教員や異文化理解の寛容性を持った教員の養成と共に教室内での複数教員の連携体制が不可欠であり、さらに学習効果を検証する専門的な調査を実施しなくてはならない。しかし本稿で提示した在籍学級での二言語併用授業は、少なくとも国際理解や多文化共生のための資質を培う教育カリキュラムとしては、他の日本人児童にとっても教育効果を発揮しうるものである。

#### 【引用文献】

佐藤郡衛(2010)『異文化間教育学 文化間移動と子どもの教育』明石書店。

佐藤郡衛・齋藤ひろみ・高木光太郎(2005)『小学校JSLカリキュラム「解説」』スリーエーネットワーク。